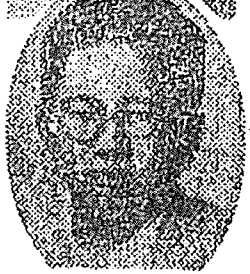
2019年12月25日
ご寄贈
③

昭和十三年十二月二十五日（日曜日）
東京朝日新聞
第一萬八千九百三十七號

「上り」には來たが 心滿たぬ學友

また荒鷲と出世双六

「大阪朝日」昨秋九月十九日海の荒鷲の南京空襲に參加し江陰附近で撃墜から投降説を抱いて脱出、敵身敵艦に殺り込み壯烈な戰死を遂げた海軍○○飛行長岡島威少佐（當時大尉）と出世双六を囘つた一大學助教授が同少佐と離らずも誓つた約束をどうして果さうかとその戰死の日このかた苦心してゐることがこの春帰り學内に感激の渦を捲起してゐる



上　岡島少佐
下　岡博士

皇太后陛下 宮城へ行啓

皇太后陛下には來る廿八日宮城へ行啓あらせられる旨二十四日仰出された當日は午前十一時半大宮御所御出門、宮城へ行啓、御奠に於て天皇、皇后兩陛下と親しの御祝詞を御交換遊ばされ、午後三時半宮城御出門、還啓あらせられる趣に渡れ居る

この　相手は阪大理學部助教授理學博士岡小天氏（三）で岡島少佐とは東京府立第五中學時代から無二の親友として首席を爭つた秀才、二人とも四年修業で一人は海軍兵學校へ一人は一高へ進んだが

故少佐の戰死に際く屍の數が加はつて行くのに比例して博士も敢大勝帥から助教授へと「上り」のコースを進み「岡島君の少佐になるのと岡君の博士になるのとはどちらが早いだらう」といふのがクラスメートの話題となつてゐた

偶々昭和九年に神戸沖の大觀艦式で來阪した岡島少佐に案内されて軍艦を見學した時「カタパルトの改良を君が研究したらどうだ」とのことに博士は何心なく「自分は專門外だからほかに適當な人を探さう」と約束

その　儘となつてゐる

今回の事變となり岡島少佐は戰死後途につきあの華々しい開となり岡氏も去る七月五日附分子の研究で理學博士となつが今はその喜びを傳へる友けくしかも追悼の新しい涙と共軍艦上で亡き友に贈つた賀狀ことで老へあぐんだ末、このを同僚に贈らしたのが學内にはつた譯である

岡博士は語る

岡島君は流石に岡島話百少將令息だけあつて中學時代からの軍人好きであつた、負けずひでよく勉强もしましたがもりまかつたです、カタパルの話は軍艦見學に行つた時話てゐたのですが今は亡友の遺にも等しいので最非立派な形にお願ひして地下の英靈に報したいと思つてゐます

遺志は必ず僕が……

故岡島少佐のカタパルト秘話

東大生感激の申出で

「大阪朝日」　昨秋九月十九日海の荒鷲の南京空襲に參加し江陰附近で撃墜から投降説を抱いて脱出、敵艦に殺り込み壯烈な戰死を遂げた海軍○○飛行長岡島威少佐（當時大尉）と出世双六を囘つた一大學助教授岡小天氏（三）と岡島少佐とは東京府立第五中學時代から無二の親友として首席を爭つた秀才、二人とも四年修業で一人は海軍兵學校へ一人は一高へ進んだが故少佐の戰死に際く屍の數が加はつて行くのに比例して博士も敢大勝帥から助教授へと「上り」のコースを進み「岡島君の少佐になるのと岡君の博士になるのとはどちらが早いだらう」といふのがクラスメートの話題となつてゐた

偶々昭和九年に神戸沖の大觀艦式で來阪した岡島少佐に案内されて軍艦を見學した時「カタパルトの改良を君が研究したらどうだ」とのことに博士は何心なく「自分は專門外だからほかに適當な人を探さう」と約束したまゝとなつてゐる

その儘となつてゐる

今回の事變となり岡島少佐は戰死後途につきあの華々しい開となり岡氏も去る七月五日附分子の研究で理學博士となつが今はその喜びを傳へる友けくしかも追悼の新しい涙と共軍艦上で亡き友に贈つた賀狀ことで老へあぐんだ末、このを同僚に贈らしたのが學内にはつた譯である

岡博士は語る

岡島君は流石に岡島話百少將令息だけあつて中學時代からの軍人好きであつた、負けずひでよく勉强もしましたがもりまかつたです、カタパルの話は軍艦見學に行つた時話てゐたのですが今は亡友の遺にも等しいので最非立派な形にお願ひして地下の英靈に報したいと思つてゐます

昭和十三年十二月二十八日（水曜日）
東京朝日新聞
第一萬八千九百四十號

「大阪朝日」　昨秋九月十九日海の荒鷲の南京空襲に參加し江陰附近で撃墜から投降説を抱いて脱出、敵艦に殺り込み壯烈な戰死を遂げた海軍○○飛行長岡島威少佐（當時大尉）と出世双六を囘つた一大學助教授岡小天氏（三）と岡島少佐とその親友故大場部助教授岡小天氏（三）と岡島少佐とは東京府立第五中學時代から無二の親友として首席を爭つた秀才、二人とも四年修業で一人は海軍兵學校へ一人は一高へ進んだが故少佐の戰死に際く屍の數が加はつて行くのに比例して博士も敢大勝帥から助教授へと「上り」のコースを進み「岡島君の少佐になるのと岡君の博士になるのとはどちらが早いだらう」といふのがクラスメートの話題となつてゐた

皇太后陛下 宮城へ行啓

皇太后陛下には來る廿八日宮城へ行啓あらせられる旨二十四日仰出された當日は午前十一時半大宮御所御出門、宮城へ行啓、御奠に於て天皇、皇后兩陛下と親しの御祝詞を御交換遊ばされ、午後三時半宮城御出門、還啓あらせられる趣に渡れ居る

この　相手は阪大理學部助教授理學博士岡小天氏（三）で岡島少佐とは東京府立第五中學時代から無二の親友として首席を爭つた秀才、二人とも四年修業で一人は海軍兵學校へ一人は一高へ進んだが

故少佐の戰死に際く屍の數が加はつて行くのに比例して博士も敢大勝帥から助教授へと「上り」のコースを進み「岡島君の少佐になるのと岡君の博士になるのとはどちらが早いだらう」といふのがクラスメートの話題となつてゐた

偶々昭和九年に神戸沖の大觀艦式で來阪した岡島少佐に案内されて軍艦を見學した時「カタパルトの改良を君が研究したらどうだ」とのことに博士は何心なく「自分は專門外だからほかに適當な人を探さう」と約束したまゝとなつてゐる

その儘となつてゐる

今回の事變となり岡島少佐は戰死後途につきあの華々しい開となり岡氏も去る七月五日附分子の研究で理學博士となつが今はその喜びを傳へる友けくしかも追悼の新しい涙と共軍艦上で亡き友に贈つた賀狀ことで老へあぐんだ末、このを同僚に贈らしたのが學内にはつた譯である

岡博士は語る

岡島君は流石に岡島話百少將令息だけあつて中學時代からの軍人好きであつた、負けずひでよく勉强もしましたがもりまかつたです、カタパルの話は軍艦見學に行つた時話てゐたのですが今は亡友の遺にも等しいので最非立派な形にお願ひして地下の英靈に報したいと思つてゐます

遺志は必ず僕が……

故岡島少佐のカタパルト秘話

東大生感激の申出で

「大阪朝日」　昨秋九月十九日海の荒鷲の南京空襲に參加し江陰附近で撃墜から投降説を抱いて脱出、敵艦に殺り込み壯烈な戰死を遂げた海軍○○飛行長岡島威少佐（當時大尉）と出世双六を囘つた一大學助教授岡小天氏（三）と岡島少佐とその親友故大場部助教授岡小天氏（三）と岡島少佐とは東京府立第五中學時代から無二の親友として首席を爭つた秀才、二人とも四年修業で一人は海軍兵學校へ一人は一高へ進んだが故少佐の戰死に際く屍の數が加はつて行くのに比例して博士も敢大勝帥から助教授へと「上り」のコースを進み「岡島君の少佐になるのと岡君の博士になるのとはどちらが早いだらう」といふのがクラスメートの話題となつてゐた

偶々昭和九年に神戸沖の大觀艦式で來阪した岡島少佐に案内されて軍艦を見學した時「カタパルトの改良を君が研究したらどうだ」とのことに博士は何心なく「自分は專門外だからほかに適當な人を探さう」と約束したまゝとなつてゐる

その儘となつてゐる

今回の事變となり岡島少佐は戰死後途につきあの華々しい開となり岡氏も去る七月五日附分子の研究で理學博士となつが今はその喜びを傳へる友けくしかも追悼の新しい涙と共軍艦上で亡き友に贈つた賀狀ことで老へあぐんだ末、このを同僚に贈らしたのが學内にはつた譯である

岡博士は語る

岡島君は流石に岡島話百少將令息だけあつて中學時代からの軍人好きであつた、負けずひでよく勉强もしましたがもりまかつたです、カタパルの話は軍艦見學に行つた時話てゐたのですが今は亡友の遺にも等しいので最非立派な形にお願ひして地下の英靈に報したいと思つてゐます

敬良は小生の知る範圍のものには中々困難とは存じますが學生の本分として專念致す樣へにて先生の御敎示を願たく存じますと赤誠を籠らせた手紙を寄せたもの。これこそ師弟の神と化した亡友の靈前に捧げる花束であると同博士も大感びで早速返事に「どうか賴りやつて賴いて少佐の遺志を繼めて下さい」との激勵と激の返事を出した